

編集委員	石戸谷 滋人, 大槻 健郎, 刈部 博, 川村 昌司, 佐野 博高, 関口 悟, 山科 順裕, 山本 譲司, 板橋 智也, 倉嶋佳誉子, 酒井 宜子, 坂元健太郎, 千葉 健, 堀内 論, 若月 悠
査読委員	小川 諒, 近田 祐介, 渋谷 里絵, 八田 益充, 福田かおり, 藤原 幾磨, 山本 多恵

## 編集後記

仙台市立病院医学雑誌第40巻をお届けいたします。今巻では原著6編、症例報告9編、コメディカルレポート2編の計17編を掲載しています。掲載論文数は前巻（第39巻）が16編で近年最多となっておりますが、今巻はさらにそれを上回る掲載論文数となりました。本誌創刊40年となる今年度は、いまだに終息のつかないコロナ禍で振り回されたこともあり、例年にも増して日常診療業務が多忙化・複雑化しています。そんな中においても学術活動に積極的に取り組んでおられる先生方・コメディカルの方々に、あらためて敬意を表したいと存じます。

世の中のデジタル化が進むにつれ、本誌や学会機関誌などの学術活動は雑誌出版からオンラインジャーナルへと変化し、本質的な中身を大きく損なうことなく生き残りが図られてきました。先日、大手医学系雑誌出版社の方と懇談した際に聞いたところによりますと、出版社が主体となって運営する（出版社系）学術雑誌の存続は必ずしも明るいとは言えないようです。歴史と権威ある邦文医学雑誌でも、投稿数こそこれまでと変わらないものの、出版物としての販売不振が深刻で廃刊が検討されているものが少なくない、と言っておられました。細分化した subspecialty のエキスパートの論文が多くを占める学会機関誌と異なり、出版社の運営する医学雑誌で扱う論文の多くは大家の「総説」や「原著」、若手の「症例報告」であり、本誌の構成に近いと言えます。出版社系医学雑誌が廃刊となればこれらの論文の受け皿はなくなり、特に若手の論文発表の機会が失われることになりかねません。そういった観点から、本誌を存続してゆくことの重要性を再認識しています。

こうしたデジタル化の流れに加え、今も吹き荒れるコロナ禍により、本年度は各種学会活動は中止・縮小開催・web開催となり、「新しい常態（ニューノーマル）」に向けて模索が続いています。幸いにも本誌はこれまで通り第40巻のオンライン出版にこぎつけることができました。高い quality の維持に加え、魅力ある内容となるよう、本誌編集委員会では今後も尽力してまいりたいと存じます。

(H.K.)

仙台市立病院医学雑誌

Vol. 40 2020

令和2年12月25日 発行

発行所 仙台市立病院

仙台市太白区あすと長町 1-1-1

TEL 022 (308) 7111

発行者 亀山元信

笹氣出版印刷株式会社 組版